

スポーツ大学における実技授業に関する一考察

— 「陸上競技」に視点を当てて—

吉岡 幹司 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 渋谷 俊浩

キーワード：実技授業，陸上競技，モデル作り

1. 緒言

大学生を対象とした生活調査では，健康・体力について，健康であると認識しているが，体力には4人に1人が不安と感じていると報告されている。

(平木ら，2004)

「陸上競技」は運動における基礎的な動きが多く含まれ，スポーツや運動をするにあたって，さらには保健体育の教育実習における指導案の作成等には必要不可欠であり，受講者自らが理解をする必要があると考える。このように，「陸上競技」等の実技授業では，これらを受講者が能動的（理論の理解と実践）に学習することが重要である。

そこで本研究では，受講者が「陸上競技」をどのような理由で受講し，どのようにとらえ，どのように活用していくのかを調査するとともに，基礎的運動能力の向上，スポーツ大学の学生として実技技能を高める，教育実習（指導案等作成）への活用，専門種目への応用，実技授業への興味・関心の増大を図りながら，実技授業のモデルを提案することを目的とした。

2. 研究方法

スポーツ系大学の実技科目「陸上競技」受講者380名を対象にアンケート調査を実施し，340名分を回収した。回収率は89%であった。設問項目は本学で実施している授業アンケートを基に，新たに卒業後のスポーツとの関わり等の設問項目も設定した。得られたデータを集計し，検討を加え，授業モデルを作成した。

3. 結果および考察

受講者は，「陸上競技」授業を通して，新しい発見があり，自ら行っているスポーツに役立てること，達成感を得ることができていた。そして，卒業後もスポーツと関わり，大学で得た知識を活用したいと回答していた。

これらのことから「陸上競技」授業で行った種目は多くのスポーツに役立つと考えられる。また，設定記録の突破だけが，授業目標の達成ではなく，苦手を克服し，得意な部分を伸ばす授業の構築が必要であることが示唆された。さらに，受講者自身も常に「なぜ」という疑問を持ち，種目の一つひとつの動きや内容を理解することができれば，授業目標以上に知識や運動技能を得られ，加えて受講者が基礎的運動能力を向上させるだけでなく，現在より能動的に受講することができれば，より多くの発見と幅広い知識・運動技能の習得に繋がっていくと考えられた。

4. まとめ

実技授業においては，授業ごとに要点をまとめ，受講者と指導教員・SAが共通理解のもと，受講者が主体となって指導教員がリードしながら展開することで，互いに影響を及ぼし，かつ相互作用を経ながら，次のような知識・運動技能の習得及び活用を充実させられることが推察された。

受講者が習得・活用できる運動技能・知識

- ・基礎的運動能力の習得
 - ・実践的知識の習得
 - ・スポーツ大学生としての能力の向上
 - ・多様なスポーツへの応用
 - ・教育実習や模擬授業の指導案作成等への活用
 - ・卒業研究の題材としての活用
- (紙面の都合上モデル図は割愛した)

引用参考文献

- 平木宏児ら (2011) 大学生の運動に関する意識について 追手門学院大学社会学部紀要 第5号 167-179
- 高知大学共通教育広報誌 (2006) パイプライン No. 27 「授業の理想形とは？」